

リヨンにセイを探ねて

嶋中 雄二

リヨンと日本人

1983年の夏から約1年間、私はフランス政府より給費をいただいて、早稲田大学大学院経済学研究科からの交換留学生として、リヨン経営大学院(CESMA, Le Centre d'Études Supérieures du Management de Lyon)留学のため、フランス第2の都市・リヨン市を見下ろす小高い丘にある町エキュリーに滞在した。

リヨン市は、紀元前43年、ローマ帝国の植民市として交通の要衝たる高台に建設され、250年頃から、眼下に見えるローヌとソーヌという2つの川の中州地帯に街が広がった。今日まで2,000年以上に亘る歴史の過程で「ゴールの首都」、「絹の都」、「近世ヨーロッパの商業・金融の中心地」、「フランス第1の食通の街」といった数々の称号を授けられてきた古都である。17世紀には、ルイ14世治世下の財務総監コルベール(J.B.Colbert)の保護貿易政策に対し、リヨン商人が抗議して、「自由にさせて下さい(Laissez faire)」と叫んだのが、「自由放任」の始まりだともいわれている。

19世紀初めにジャカル(J.M.Jacquard)によって発明されたパンチカード式自動織機は、リヨ市内の、ケーブル・カーに乗って行くような急勾配のあるクロワ・ルッス地区で、現在も展示されていると思われるが、この機械は産業革命の担い手として活躍した。日本の経済・産業や伝統文化にとっても無縁でなく、実際に1870年代、京都府からの当地への職員の派遣により、西陣の織機業の近代化に大きな影響を与え、富岡製糸場も同様だったようだ。日本人では、作家の永井荷風と遠藤周作がリヨ市内に滞在した。荷風は戦前、横浜正金銀行(後の東京銀行、現・三菱東京UFJ銀行)の行員として、リヨ市内を流れるローヌ川左岸のサン・ポタン教会のすぐそばに住みながら勤務していたという。その当時のことは、彼の『ふらんす物語』(1952年)に詳しく描かれているが、その中で荷風が何故か、一貫してローヌを「ローン」と呼んでいるのも面白い。

その荷風が1940年に書いた、『ローン河のほとり』と題する短編を少年時代に読んで、リヨンに憧れていた遠藤周作は、1950年から53年までリヨン大学に在籍した。遠藤は、特に冬に厚い霧が発生して陰うつな気分になるリヨン独特の気候の中で育まれてきた、黒ミサのようなリヨン文化の暗い部分をえぐり出した(『リヨンの四季』、1961年)。そういえば、ギニョールと呼ばれる人形劇は薄気味悪いし、後に世界遺産に登録された、15

～18 世紀の旧市街の街並みや石畳みには、伝統的な暗さが湿気と共に宿っている。極めつきは、あの予言詩で有名なノストラダムス(M. de Nostredame)が、本の出版のため、リヨン旧市街に滞在した事実があり、しかもその建物までが現存していることだ。

リヨン人としてのセイ

とはいえ、リヨンはもちろん、暗いばかりの街ではない。ここで、私自身のことに戻るが、翌 1984 年の夏に米国スタンフォード大学フーバー研究所のヴィジティング・スカラーとして短期滞在のため渡米する直前の 1 カ月間は、自由な時間がかなりあった。そこで私は、自分の興味の赴くままに、楽しくリヨンの内外を探訪していた。CESMA の友人たちと、後に 1996 年のリヨン・サミット(第 22 回主要国首脳会議)で総料理長を務めたポール・ボキューズ(Paul Bocuse)氏のリヨン市郊外にある、有名な 3 つ星レストランを訪れたりもした。

そんなある日、当地でお世話になっていたリヨン日本文化協会会長のミシャレさんという高齢の紳士との会話で、エコノミストである私が、たまたま「フランスにも、昔はセイのような素晴らしい経済学者がいたのに、今ではあまりいないですね」と嘆いたところ、ミシャレさんが何と、「あれ、セイという人は確かリヨン人ですよ」と教えてくれたのだった。

それを聞いて矢も楯もたまず、早速翌日から、私はリヨン市内の図書館に通って、セイのリヨン時代のことを調べることにした。セイ(Jean Baptiste Say、1767～1832)は、ケネー(F. Quesnay)やバスティア(F. Bastiat)、ワルラス(L. Walras)等と並び、フランスが生んだ偉大な経済学者の 1 人である。「供給はそれ自らの需要を創り出す」という「販路法則」で有名であり、1970 年代以降に米国で発展を見た「供給側(サプライ・サイド)」経済学の生みの親ともみなされている。加えてセイは、20 世紀を代表する経済学者であるシュンペーター(J.A.Schumpeter)の「イノベーション(革新)」理論に先駆けて、生産活動の主役が企業家(l'entrepreneur)であり、企業家による「大胆な実験」が新たな生産物を生み出すと考えた、発想力豊かな人物であった(『経済学概論』、1803 年)。さらに、セイが考案した企業家概念は、1980 年代にドラッカー(P.F.Drucker)を通じて、経営学さえも刷新する力となった。

このような輝かしい業績にもかかわらず、セイの知名度は何故か高くない。当然にも、セイのリヨン人としての生活は、フランスでも殆ど知られていないわけだが、暇に飽かせて、私は彼の戸籍謄本から肖像画まで、ありとあらゆるものを収集し、彼の生まれた場所や幼年期、少年時代を過ごした場所を調べ、実際にそこに行ってみた。これらの収

集資料からの私の推測によると、セイは 1767 年 1 月 5 日、リヨンの中心市街にあるビゼー通りとアルブル・セック通りとが交わる三角地帯に当時あった小さな病院で産声をあげた。今日、この誕生の地は、当時はなかった大通りに分断されて、残念ながら、昔の面影をとどめていない。

セイと私の距離

次に私は、市立古文書館を訪ねてセイの戸籍謄本を調べてみることにした。ところが、いくら探しても見つからない。そこで、手伝ってくれた館長の女性が、こんなに探してもないということは、ひょっとすると彼はプロテスタントなのでは、と気づき、プロテスタントの台帳を調べてくれた。すると、何とその第 1 頁にセイの名前が載っていた。その台帳は、同じ年のものでも何冊もある、分厚いカトリックの台帳とは対照的に、信じられない程貧弱で薄っぺらい、しかもたった 1 冊しかない代物であった。旧教徒の国であるフランスで、敢えて新教の信者であるのには、もともと外国から渡来したなど、理由がないはずはないが、それが彼の展開する経済学説とどう結びつくのかは不明である。

調べてみると、セイは、スイスのジュネーブからやって来て、絹商業を学ぶためリヨンの大商人カスタネ氏宅で奉公していた父と、そのカスタネ氏の長女であった母との間に、3 人兄弟の長男として生まれた。そして、間もなくリヨン市の東側を流れるローヌ川の美しいほとりに両親と共に移り住む。パリで書いた彼の回想録の中で、セイは幼年時代を懐かしみ、「リヨンほど美しい都市はない」と述懐している。9 才になった少年セイは、イタリア人神父がリヨン郊外のエキュリーの丘の上に建てた神学校の寄宿舎に移って、数年間、勉学に励んだという。

この話を知った私は、懸命にその場所を探り当てようと努力した。といっても、私はエキュリーにある CESMA の学生寮に住んでいたもので、それは比較的楽な作業であった。古文書館の館長に紹介していただいた、エキュリーの町の史家のジョトゥールさんという人が、「ああ、そのペンションなら、半分は、今もなお 18 世紀のまま朽ち果てかかって残っていますよ」と教えてくれた。実際に行ってみると、確かに朽ち果てかけた黄土色の建物があり、それは一見して 18 世紀の建立だとわかるような廃墟に近いものだった。そして、この偉大な経済学者セイが学んだ場所は、何と驚いたことに、私が 1 年間過ごし、毎日 CESMA まで通った学生寮から、歩いて僅か 2 分の距離にあったのである。「神の思し召し」というべきか。ただ、あれから 32 年も経過した今、おそらくそのセイの寄宿舎はなくなっているだろう。

さて、その 1 カ月後、米国カリフォルニア州パロ・アルトに渡った私は、当時スタンフォード大学フーバー研究所でシニア・リサーチ・フェローを務めていたソーウェル (T.Sowell) 博士に、研究所の中庭で偶然会い、セイについての私の体験談を話すと、大変驚かれた。ソーウェル博士こそは、1972 年に『セイの法則－歴史的分析－』という本を書いて、米国における供給側経済学を創始する 1 人となった黒人の経済学者なのであった。それは、私がフランス語という言語を勉強していて「役に立った」と、心より感じた瞬間でもあった。

(三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社 参与
景気循環研究所長)